

この時代に

②

河川敷の公園を散歩していた夫婦が外国人グループに襲われた。妻はレイプされ、そのことを苦に自殺。夫も後を追った――。

こんなうわさが一昨年の秋、福岡県の中西部で広がった。地元の警察やメディアに、真偽をたえず問い合わせが相次いだ。福岡県警は「根拠のないデマだ」と断言する。うわさを否定するちらしを回覧した警察署もあった。

これとほぼ同じ内容のデマが90年から92年にかけて、関東地方で繰り返し流れた。80年代後半に外国人労働者が大幅に増えてからまもなくのことだ。

当時、現地調査をした福岡県立大講師の三隅譲二はその内容について「抽象的な身振感をもって外国人をこらえたデマの典型」と分析した。日本人の生活防衛意識にはまったからこそ、数万人単位を巻

き込んだとみる。日本で外国人が置かれている状況の不安定さは当時とほとんど変わっていない、と言いつつ。

1万枚に及ぶ「防犯」ポスターが20都道府県の郵便局や金融機関に届いた。イラストの外国人男性が、現金自動預入払出機(ATM)の前で「ワタシ、ワカリマセン」と女性に道を尋ねる。そのすきに仲間がバッグの中の札束に手を伸ばす、という内容だ。

山梨県内の市民団体は「外国人イコール犯罪者というイメージを流布させる」と抗議。まもなく山梨県警は撤去を決めた。

「表現の自由の名のもとに、差別表現が野放しになっている」。こんな日本の状況が3月、国連の人種差別撤廃委員会で論議の中心になった。

外国人への偏見、根に

根拠のあいまいな情報が社会に広がる。

ポスターは地元の警察と、警察庁などの外郭団体・日本防災通信協会の連名だ。作製

「中国人かな、と思ったら110番」。警視庁が昨年春に、こんな呼びかけ文を添えた。

「身近な人はみんな協力的。なのに、いまだに悪いことが起きると外国人のせいにする人がいる」と残念そうだ。

そして、不況の今。20日、東京であった外国人労働者のミーデーに約150人が集まり、口々に不安や不満を訴えた。91年に来日したイラン人のハミド・ジャリリ(41)は

「委員会は「差別の流布・扇動を禁じる」とは、表現の自由と矛盾しない」という立場をとる。

「外国人労働者をめぐる状況に詳しい立教大教授の宮島壽は「人々の意識がより内向きになった。外国人の存在が当たり前になったことで、心の底にしまっていた差別が表出してきた面もある」と指摘

「審理では東京都知事、石原慎太郎の「三国人」発言について、国会で政府が擁護する立場を示したことなどに委員の疑問や批判が相次いだ。

アルゼンチンの委員はこう指摘した。

「ほかの人々の存在を否定する言論は、物理的暴力よりも時に激しい暴力となる」

「嫌悪」の流布



The Asahi Shimbun

「女・きく・はなす」は「ま」第24部

(敬称略)